

◎フェジン静注 [注]

【重要度】 【一般製剤名】 含糖酸化鉄 Ferric Oxide, Saccharated 【分類】 静注用鉄剤

【単位】 ◎40mg/A [2mL]

【常用量】 40～120mg/日

【用法】 2分以上かけて緩徐に静注または10～20%ブドウ糖液に5～10倍に希釈して点滴静注 [通常20%ブドウ糖注を使用]

【その他の報告】 5%ブドウ糖もしくは生食に希釈 (50mLに希釈も可) してもコロイドは分解しない (Hira D, et al: J Pharm Health Care Sci 2018 PMID: 30062041)

【透析患者への投与方法】 鉄欠乏時に1A (40mg) を20%ブドウ糖注20mLに希釈して週1回HD後に投与 [最新の貧血治療ガイドラインを参照] (1)

【その他の報告】 TSAT が20%以下で、フェリチン100ng/mL以下ならESAに対する良好な反応が期待できないため鉄剤の投与が必要となる (透析フロンティア 12:16-17, 2002) 透析患者への静注鉄剤投与が6か月でデキストラン鉄として1000mg以上であると入院頻度、死亡率ともに上昇する (Feldman HI: J Am Soc Nephrol 13: 734-44, 2002) 鉄欠乏時には10回連続のHD時投与が週1回10週投与に比べ有効 (Nephron 89 :110-2, 2001) フェリチン値を基準とした鉄補充の開始基準は60ng/mL (望月隆弘, 他: 透析会誌 47: 313-2, 2014)

【保存期CKD患者への投与方法】 Cer 10mL/min以上: 減量の必要なし, Cer < 10mL/min : 1回40mgを週に1～3回投与, 過量投与にならないよう注意する [最新の貧血治療ガイドラインを参照] (5)

【特徴】 鉄欠乏性貧血の補充療法として効果を示す。非経口投与のため過量投与 (10～60分後に下痢、悪心、激しい胃痛、嘔吐が早期徴候として現れる) が問題となるため必要量を算出して投与すべきである。

【主な副作用・毒性】 発熱、発疹、悪心、頭痛、ショック、過量投与によりヘモジデロシスおよびヘモクロマトシスなど。

過敏反応は補体 (卵経路) 活性化に関与し、CARPA と呼ばれる (Szebeni J, et al: Br J Pharmacol 2015 PMID: 26265306, Hempel JC, et al: Am J Nephrol 2017 PMID: 27889746)

【安全性に関する情報】 慢性肝障害を合併している患者では上記の目安で鉄剤投与すると肝障害が悪化しやすい。肝障害を合併した透析患者では血清フェリチン値が30ng/mL以下で貯蔵鉄が枯渇しているため30～50ng/mLが1つの目安であり、網状赤血球Hb含量の低下 (26pg以下)、低色素性赤血球比率 (10%以上)、血清トランスフェリンレセプターの上昇 (1000ng/mL) などから鉄欠乏が疑われれば鉄剤の投与が必要となる (透析フロンティア 12:16-17, 2002) 鉄欠乏のCKD患者に鉄剤を静注投与すると血小板数が下がる [デキストラン鉄での検討] (Yessayan L, et al: BMC Nephrol. 2014 PMID: 25038614)

【排泄】 体内の鉄は通常尿、糞便、汗、髪、爪、脱落皮膚、月経血などとして排泄される (1)

【蛋白結合率】 データなし (1)

【Vd】 データなし (1)

【分布】 静注後、細網内皮系に取り込まれ、徐々に乖離してトランスフェリンと結合して移動する (1)

【MW】 大きい

【透析性】 透析されないと思われる (5)

【TDMのポイント】 ESA投与時の鉄補給: 目標ヘモグロビン濃度を10g/dLとすると $\{2.7 (10\text{-ヘモグロビン濃度}) + 17\} \times \text{体重 (kg)}$ で何mgの静注鉄剤が必要かが算出できる。つまり体重50kgの人でヘモグロビン濃度が7g/dLの患者の場合、上記式より1200mgの鉄が必要となり、本剤を30回投与する必要がある。ただしこの量はあくまでも目安であり、鉄剤投与中は定期的に血清フェリチン値、鉄飽和率などのチェックが必要になる

【主な臨床報告】 静注鉄を含む過敏反応に関する機序と対応 (Szebeni J, et al: Br J Pharmacol 2015 PMID: 26265306)

【更新日】 20231229

※正確な情報を掲載するように努力していますが、その正確性、完全性、適切性についていかなる責任も負わず、いかなる保証もいたしません。本サイトは自己の責任で閲覧・利用することとし、それらを利用した結果、直接または間接的に生じた一切の問題について、当院でいかなる責任も負わないものとします。最新の情報については各薬剤の添付文書やインタビューフォーム等でご確認ください。

※本サイトに掲載の記事・写真などの無断転載・配信を禁じます。すべての内容は、日本国著作権法並びに国際条約により保護されています。